

# 第4回鶴岡市における言語調査の設計と実施

前田 忠彦 データ科学研究系 准教授

## 【鶴岡市における言語調査とは】

- 「鶴岡市における共通語化の調査」  
<http://www2.ninjal.ac.jp/keinen/turuoka/>
  - 国立国語研究所が実施する定点経年調査の方法による言語調査
    - 他に、岡崎調査、北海道調査など
  - 第1次、第2次調査では、統計数理研究所のメンバも参加
  - 山形県鶴岡市で昭和25年からほぼ20年ごとに実施
    - 第1次調査 昭和25年(1950年) 10~11月
    - 第2次調査 昭和47年(1972年) 3月
    - 第3次調査 平成3年(1991年) 11月
    - 第4次調査 平成23年(2011年) 11月~
- ←統計数理研究所と国立国語研究所の共同研究として実施



## 【第4回鶴岡市における言語調査の設計】

### 【調査全体の設計】

- ランダムサンプリング調査(RS調査)とパネル調査の組み合わせ
- ランダムサンプリング調査
  - 調査対象者を、ある母集団(調査対象の全体)から無作為(ランダム)に標本抽出(サンプリング)して行う調査。
  - 標本を抜き出す元の集団(=母集団)の状況が推定できる。
  - これを繰り返すことにより社会の変化を捉える
- パネル調査
  - かつて、ランダムサンプリングによる調査に協力して下さった方に、再度調査にご協力いただく調査。
  - 個人のことばの変化を知ることができる。
- 第4回調査では、RS調査を統計数理研究所が、パネル調査を国立国語研究所が主に担当

### 【第4回RS調査の設計】

- 調査対象者: 鶴岡市(図1の対象地域)に在住する15~79歳の男女700名, 対象者の抽出は系統抽出法による。

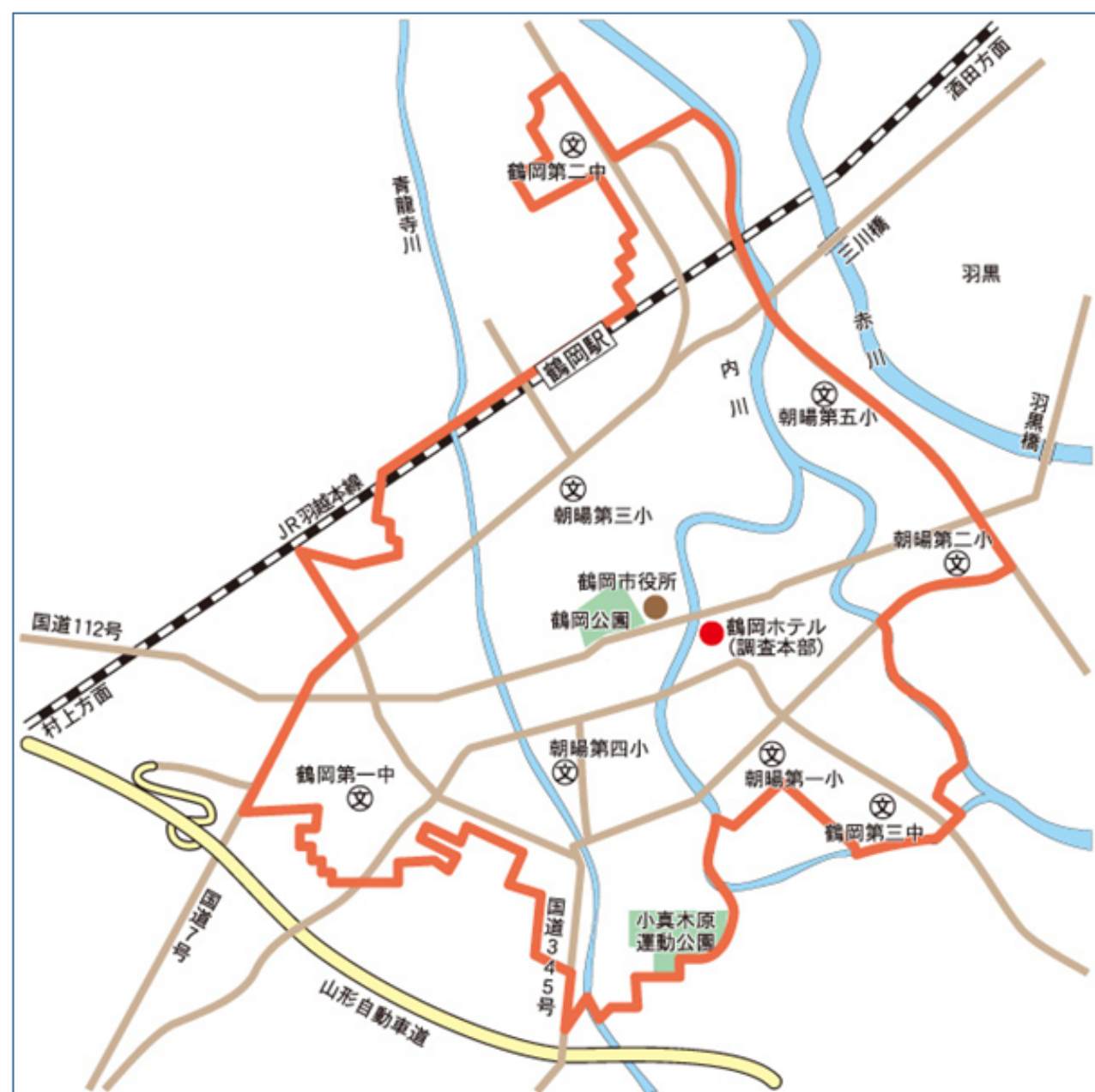


図1. 対象調査地域(国立国語研究所のHPより)

- 調査方法: 予め郵送された自記式の「言語生活調査票」への回答, 面接調査による実際の話し言葉の録音の二部構成。
- 調査担当者: RS調査の対象者のうち、ほぼ9割は専門調査会社への委託により実施。残り1割を統計数理研究所の調査員が実施。
- 調査時期: 本調査: 2011年11月11日~12月5日, 補充調査: 2012年1月27日~2月15日の2回にわたって実施

## 【調査項目】

- 面接調査: ICレコーダで録音
  - 絵を見せたり, 口頭でなぞなぞ式の質問をして回答してもらう
  - 鶴岡方言の特徴である言語面に焦点をあてる項目
    - 音声(単音とアクセント)
    - 語彙・文法形態
- 自記式調査(言語生活調査票): 回答者自身が(事前に)記入
  - 言語生活を焦点化した項目
    - 方言と共通語の使い分け意識
    - マスメディア, 共通語話者との接触度
    - 方言や地域の文化に対する意識 などの意見に関する項目
- 継続調査項目(音韻・音声に関する項目) 表1を参照。

表1. 音韻・音声に関して4回の調査で継続使用された項目

分類名	調査の観点	調査語
唇音性 I	合拗音kwaの有無	スイカ, カヨウビ
唇音性 II	ハ行における両唇音の有無	ヒゲ, ヘビ, ヒヤク
口蓋化	「せ」「ぜ」における口蓋化の有無	セナカ, アセ, ゼイムシヨ
有声化	非語頭におけるカ行・タ行の有声化の有無	クチ, ハチ, ハト, ネコ, ハタ, クツ, カキ, マツ
鼻音化	非語頭におけるザ行・ダ行・バ行の直前の入りわたり鼻音の有無	マド, スズ, オビ
中舌化 I	ウ段音における中舌化の有無	チズ, スミ, カラス, キツネ
中舌化 II	イ段音における中舌化の有無	チジ, シマ, カラシ, ウチワ
イとエ I	語頭の母音エにおける狭母音化の有無	エキ, エントツ
イとエ II	語頭の母音イにおける広母音化の有無	イキ, イト
アクセント	共通語のアクセント型の実現	セナカ, ネコ, ハタ, カラス, ウチワ

- 第4回調査での新規導入項目
  - 「共通語で」と指示 ⇒ 共通語運用能力
  - 「友達との会話で」 ⇒ カジュアルな場面での使用言語
  - 「鶴岡弁で」と指示 ⇒ 方言運用能力

## 【調査実施結果概要(暫定値)】

- 回収状況: 表2の通り(2012年2月16日現在の暫定値)

表2. RS調査とパネル調査の回収状況

	回収数/総数	回収率
RS調査	466/700	66.6%
パネル調査	333/437	76.2%

- これまでの調査回を含めて表現した鶴岡調査の実施状況概要(図2)

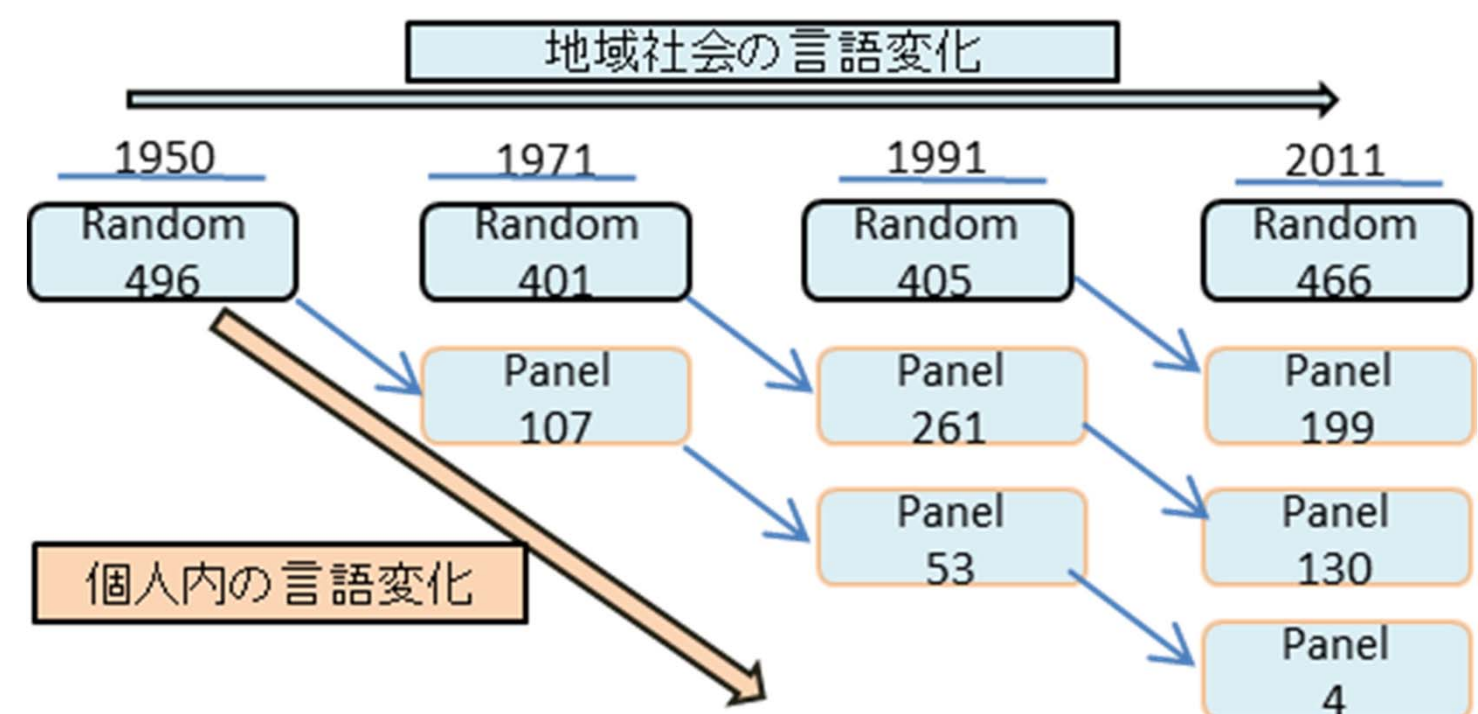


図2. 第4回までのRS調査とパネル調査による調査設計・結果

- RS調査の回収率は性・年齢について一様ではない: 標本と母集団の年齢分布の比較(図3)参照 → 女性高年齢層の重みが大い。

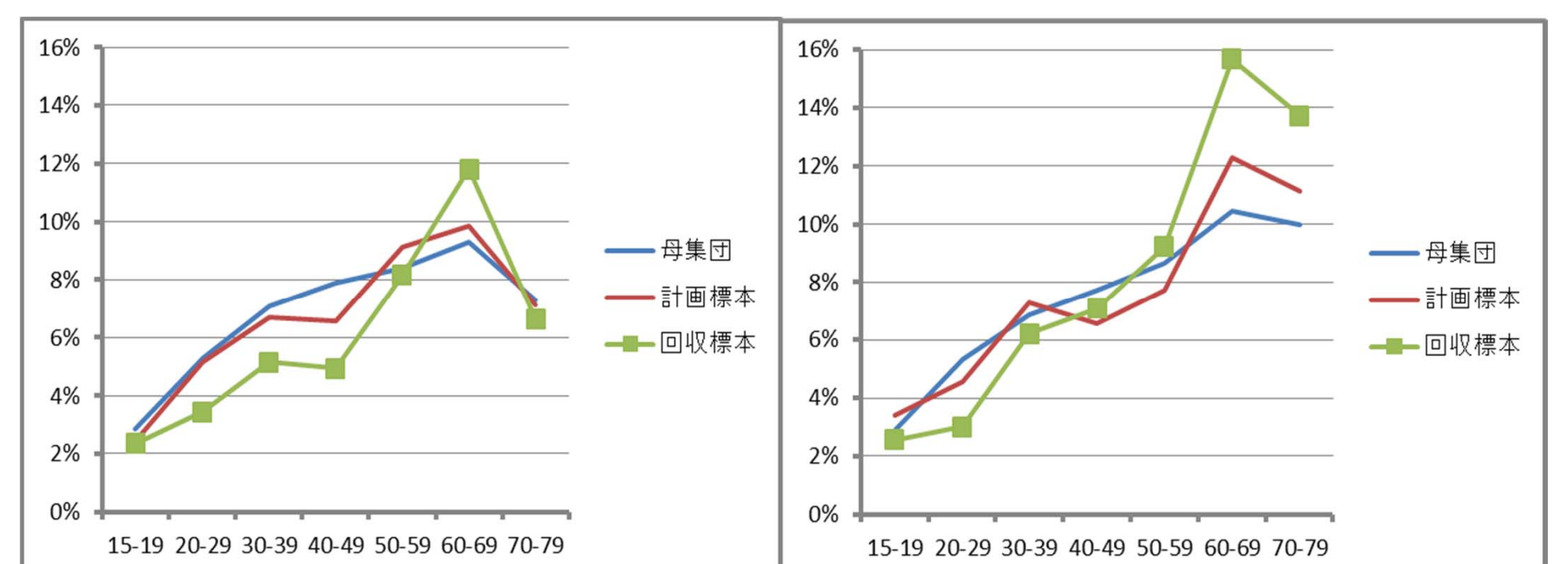


図3. 標本と母集団の年齢分布の比較(左=男性, 右=女性)